

雛に寄せて

附属幼稚園のお雛さまのこと

小林 すみ江

春を待つ日の美しい行事なのである。

雛まつり——何となつかしい響きの言葉であろう。毎年めぐり来るこの日、女性たちはそれぞれの雛を飾る。

ことにその年女児に恵まれた家庭では、その健やかな成長を祈つて新しい雛をととのえる。また、すでに子らの

巣立った家であっても、小さな土雛に桃の一分枝でも添えて卓上に飾れば、もうそれで立派な雛まつり、心は幼女のようにならぬ。思い出はたちまち遠い日へ立ち帰る。

それはまことに、すべての女性たちの胸をふくらます、

◇雛まつりの由来

しかし、雛まつりが今日のような形になつたのは、さのみ古いことではない。むろん三月三日（上巳）の節供そのものは、遙か平安朝の頃中國から渡來した歳事の習俗なのだが、その日、身の穢れを祓うために用いた形代が、やがて美しい人形となり、祀られるようになるのは

わが国独自の風習である。そして、いわゆる雛人形が現われるのは室町時代以降のこと、またそれが庶民の間に普及して雛段が設けられ人形や雛道具がその数を増すのは、江戸時代も中期以降のことであった。その縁起も、原初の祓いの意識から、次第に娘たちの、のちには誕生した女兒のための幸福への祈りへと変化して、今日見られるような人形美にみちた一つの世界を現出するまでになったのである。そこには、渡来文化が長い時間をかけてきわめて日本的に変化してゆくひとつの例も見られようし、また、この雛まつりを核として日本の人形文化が花ひらいたということも言えよう。かくして雛まりは実に色濃く、日本人の民族、風俗、またその人形観の形成にその影を落としているのである。

◇一枚の写真から

むずかしいお話はさておき、お茶の水の附属幼稚園のお雛さまのことをお話ししたいと思う。とはいって、私は決してこの目でそれを拝見したわけではない。それはも



▲お茶の水女子大学附属幼稚園の雛飾り、全景

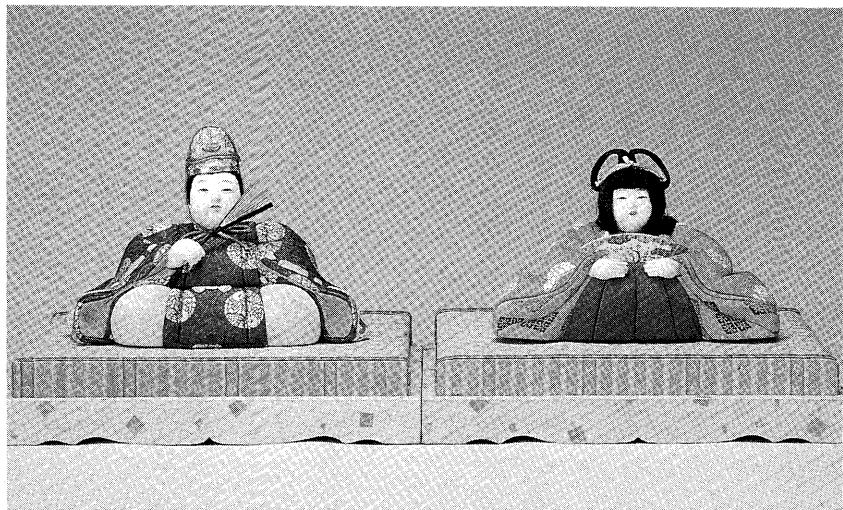
うかれこれ十年ほども前のこと、幼稚園から何かご注文を頂いた私どもの社の者が納品の際写してきた写真から始まつたのであつた。しかし、まるでお見合い写真に魅せられたかのように、私の目はその数枚のスナップに釘付けになつた。そこには、人形を学ぶ者にとって実に多くの貴重な情報が溢れていたからである。

雛段に居並ぶ愛くるしい子ども顔の十五体の稚児雛は、まぎれもなく後年近代御所人形の作家として大成された野口光彦氏少壯の頃の作品であつた。そして何と、最上段の内裏雛一対は、私どもの社に大切に保存されているものと寸分違わぬ品なのだった。園から伺つたところでは、羊羹の老舗藤むらの子息の卒園記念に同家から贈られた寄付金をもとに、昭和十三年に私の亡父・吉徳十代目山田徳兵衛が調製した品のこと。それで私は、私どもに残る雛はその折の試作品でもあつたのかと、はたと心付いたのだった。

そしてそれと共に浮かび上るのは、亡父が当時お親しくさせて頂いていた東京女高師教授・倉橋惣三先生のこと

である。保育の立場から人形による情操教育を重視されていた先生に、父は大変可愛がつて頂いた。そのことは、當時上梓した父の著作に先生がご懇篤な序文をお寄せ下さつたことや、父たちが組織した創作人形作家の登龍門「童宝美術院展」の審査員を先生が快諾して下さつたことなどからも十分推測されよう（先生がその温顔をさらに綻ばせて、毎日実に楽しそうに審査に立ち合つて下さつたことを、父は先生の思い出話として昭和四十一年の『幼稚の教育』に寄稿している）。幼稚園のお雛さまも、きっとそんなん縁でお納めしたものであろう。（なお、私ごとだが、私も一度だけ先生の温容に接した遠い記憶がある。それは昭和十二年、小学生の私は父に伴われて、當時中野にお住まいだつた先生をお訪ねした。狭い階段を上つた二階のお書斎にご本が沢山あつたこと、また椅子に掛けられた先生が、本当ににこにことしたつややかなお顔で迎えて下さつたことなどが思い出される）

野口氏のこの稚児雛は、私どもの所蔵品をもとに昭和



▲野口光彦作「稚子雛」(吉徳これくしょん)、附属幼稚園の内裏雛と同型

六十年、郵政省が「江戸きめこみ人形」の記念切手の図案に採用した。こうした例も大変稀なこと、「ウチのお雛さまは切手になつたのよ」と、お茶の水の園児たちは大いに胸を張つてよいであろう。

◇野口氏のこと

お雛さまの作者・野口光彦氏（一八九六—一九七七）にもぜひ触れておきたい。

日本人形は通常、頭師かしらしと着付師との分業で製作されるが、野口氏は祖父の代から頭師の家に生まれた江戸っ子である。幼くして父を失い、祖父に師事して仕事の基礎をみっちり仕込まれた氏は、昭和初年すでに頭師として頭角を現された。しかし職人としての地位に甘んじることを嫌われ、当時心ある人形師たちが結成した人形芸術運動の旗手として創作人形への途を歩み始めた。昭和十一年、この運動が実って人形は初めて帝展（現在の日展）に一つの位置を占めたが、この時、狹き門をくぐつて入選した六名のなかに、氏の名前があった。入選

作は「村童」。古典的な御所人形の手法に近代的な造型

ていることである。

美を加味した氏の創作は高く評価された。なおこの時

入選者の中には後年の人間国宝三名も名を連ねているの

だが、野口氏の場合は、戦後、氏のもとを人間国宝認定

の件で訪れた文部省のお役人と口論し、みずからそれを
辞退されたという経緯もあって、終生無冠の帝王を貫か
れた。純白な胡粉(ごさん)の輝きと凛とした氣品を生命とする御
所人形の作者らしいエピソードといえるのかもしけ
ない。

お茶の水のお雛さまをあえて子ども顔に作り上げたと
いうのも、意欲と自信に裏打ちされた若き日の野口氏な
ればこそであろう。かといって、そこには生硬な芸術家
の氣負いなど微塵も見られない。十五人の雛たちの何と
童心にみちた清らかな表情であることか。野口氏の遺作
集にそのひとつひとつアップが載ったのを見て、私は
舌を捲いたのだった。お茶の水のお雛さまを、いわばお
見合い写真で見染めた私の眼に、やっぱり狂いはなかつ
た——これは私がいまも内心、ちょっぴり誇らしく思つ

◇「青い目の人形」となかよし人形



スナップ写真のもたらした発見は、そればかりではなかった。

最下段の向かって左側に座る二体のベビードールにも、私の目は吸い寄せられた。もしかして、これは昭和のはじめに友情の人形使節としてアメリカからやってきたあの「青い目の人形」の仲間ではなかろうか!? なかでも向かって右の小型の人形は、その時の人形に最も多かったアメリカンコンポジションドールであった。

「青い目の人形」は昭和二年、日米摩擦を心配するアメリカの知日家、シドニー・ギューリック博士の提唱で全米から集められた一万余体の人形が、はるばる海を越えて日本各地の小学校や幼稚園にとどけられたというものである。これに対し日本からは大型の少女人形五十八体を全米各州に贈り、これも当時大きな話題を呼んだのだが、不幸な戦争のさなか、青い目の人形たちの大半は敵視され、壊されたり焼かれたりしてしまった。現在全国に僅か二百六十六体（平成六年二月現在「横浜人形の家」調べ）の存在が確認されているだけであるが、

いよいよ、昭和六十年山口書店刊）。

さいわい、写真で拝見する限り、メアリーちゃんは六十八年の歳月を経つても元気でいるようである。色艶もよく、目立った痛みもないのは、よほど大切にされてい るのだろう。折しも平成七年は戦後五十年の節目にあたる。メアリーちゃんを囲んで、幼い園児たちに平和の大切さをやさしく説ききかせるのも、また意義深いことではあるまいか。

さて、メアリーちゃんたちと共に並ぶおかっぱさんの日本人形は、昔の女の子の最良の友・市松人形（やまと人形とも）であるが、中にお行儀よくお座りして何かを

語りかけるようなしぐさをしているのは、当時私どもで発売した、関節が自由に曲げられる「なかよし人形」であった。しかもその名付け親こそ、これまた他ならぬ倉橋惣三先生ご自身なのである。塩化ビニルなどの丈夫な素材のなかつた時代、お人形といえばこうした日本人形を指したわけだが、西洋人形に啓発されてか、この「なかよし人形」はおなかにママー笛を仕込み、手足に特殊な金属を用いて、どんなボーナスも出来るよう工夫した画期的なものであつた。「今までの人形のやうに静かにだっこされてゐるばかりでなく、なかよくいっしょに遊んで呉れる人形……わたしたちはどんなにか長い間待ちかねてゐたことでせう（原文のまま）」、先生の推奨の辞が私どもの旧いカタログに残る。しかし、戦時中の統制で金属が使えなくなり、この人形も僅か数年で全く姿を消してしまった。その意味でも、これらが健在で、今なおお茶の水の雑段に並んでいることはまことに大きな驚きであった。

◇和宮さまのお人形

発見はさらに続く。最上段左端に小さなお人形が佇んでいる。赤い打掛けを着、髪を稚児輪に結った福々しい



▲和宮さまのお人形

おかめさんの御所人形——それは、幕末の公武合体で徳川家に嫁がれた皇女和宮（のちの静寛院宮）さまゆかりのお人形に他ならなかつた。

明治天皇はこの若い叔母宮を大変慕われ、宮によく似たお人形をお傍に置いてその面影を偲ばれたと伝えられるが、昭和十四年、宮の婦徳を讃える財団法人静寛院宮奉讚会が、このお人形の復原品を作つて希望者に頒布した。それこそが雛段に佇むお人形なのである。亡父が調製に当たつたことから、おそらくこれも倉橋先生とのご縁で園に来たものであろう。原型となつた明治天皇遺愛の品は、戦前の国定教科書にもその写真が載つていたが、今ではその存在すら確認できない。辛うじて「鏡様人形」と命名されたこの復原品が、その面影を伝えるのみである。そして私の知る限り、この復原品すら、お茶の水と私どもの社と、わずか二体が確認されているばかりである。何と貴重な存在であることか——倉橋先生のご配慮はここにも生きていたのである。

以上、写真から読み取れるすべてを語り尽くしたが、

思えば、雛段の中に集う子らに幸せを与え、またすぐすく育つ彼らの生命力を貢つて、毎年大切に祀られていることが、お茶の水の雛たちをかくも輝かせているのではあるまいか——そんな心持ちがするのである。

なお、幼稚園にはさらに、女高師教授矢沢弦月氏の筆による立雛図の軸と、園児の父兄であられた帝展審査員石川確治氏が彫られ、夫人が彩色されたというみごとな木彫雛の一対とがつて、こちらも毎年飾られていると承つた。これも亦大変な文化財である。ともに末永く大切にされることをひたすらお祈りしている。

（吉徳資料室長）